

ハノイ大学主催 第12回協働実践研究会セミナー報告

2017年6月5日(月)9時~12時半までハノイ大学日本語学部の主催で協働実践研究会が開催されました。参加者は22名で、副学長や中国語学部、英語学部等、日本語学部以外の先生方も参加されました。した。なお、ハノイ大学には、ベトナム人教師4名が政策研究大学院(GRIPS)と国際交流基金の連携による大学院プログラムの修了生で、うち2名はピア・ラーニングのテーマで修士論文を書かれ、その後GRIPSとハノイ大学でそれぞれ博士号を取得されています。今回のテーマは、主催側の強い希望により、下記のような内容でのセミナーとなりました。

- ・近藤彩(麗澤大学)「大学院における研究指導とは一教師の成長に向けて」
- ・金孝卿(大阪大学)「協働実践研究のこれまでの紹介(質的研究方法を中心に)」

前半では、学部・修士レベルの論文指導上の課題に関連して、「いい修士論文とは」「指導教員のすべきことは」などのトピックについて、参加者間で活発な意見交換が行われました。その中でも、「論文指導における学生の主体性と教員による指導のバランス」について活発な議論がなされました。また、学習者同士で学び合う「ゼミ」制に対する強い関心が示されました。最後に、協働実践研究の中から質的研究方法による研究事例が紹介されました。最高気温40度を超える猛暑日でしたが、皆様大変熱心に参加され、ディスカッションも盛り上がり、会場はますます暑くなりました。



近藤氏の講演の様子



終了後の集合写真



ハノイ大学日本語学部の会場にて(左から、神村初美氏(東京福祉大学)、近藤彩氏(麗澤大学)、金孝卿氏(大阪大学)、品田潤子氏(国際日本語普及協会))

文責：金孝卿